安田女子大学大学院紀要　第26集
教育学専攻

人を育てる営みに関与する青年のジェネラティヴィティ
―教育・保育の営みに焦点をあてて―

永　田　彰　子

Research on Generativity of Young Adulthood: Focusing on the Context of Workers Engaged in Education and Childcare

Akiko NAGATA

Abstract

This research considers the development and changes of Generativity, coined by E. H. Erikson, among youth and young adulthoods who are engaged in education and childcare and highlights the need of further empirical research which focuses on Generativity in the context of these workers. As Generativity has been explained as a developmental task of middle aged people in terms of the cultural demands surrounding this aged people, which develops Generativity, youth has not been explained as a age which is seen a significant development of Generativity. However, when it comes to the working environment of those youth who are engaged in education and childcare, they are frequently faced the cultural demands during their work. The recent tendency of declining of birth rates have encouraged the sector of education and childcare to play a role significantly to support and develop children and their family in a local community.

キーワード：Generativity, Young Adulthood, Nursing the next generation, Education and childcare

は　じ　め　に

現代社会において取り組むべき大きな課題として，少子化の急速な進行ならびに家庭や地域を取り巻く環境の変化が指摘されている。核家族化の進行や，地域の人間関係の希薄化が進む現代においては，子育ての孤立状況が生じやすい。家庭や地域においての人と人の豊かな関わりを生み出し，子どもの発達を保障していくために，地域社会がどのような方策で子育てに直接的，間接的に関わっていくかが喫緊の課題である。

このような状況において，子どもの健やかな育ちを保証する社会的責任を担う者として，教育・保育に携わる専門職への期待は大きい。いつの時代でも次世代を担う子どもを健全に育てることは，現在を生きている者が果たすべき責務でありその資質を身に付けることは重要な教育的

課題の一つである（岡野, 2003）。とりわけ教育・保育として未来を担う子どもを育てる職業に従事する者には，次世代育成力の発揮が求められる。この次世代育成については，生涯発達の観点から心理社会的発達論を提唱したEriksonのジェネラティヴィティ概念が参考になる。「次世代を確立させて導くことへの関心」（Erikson, 1950, 仁科訳1977-1980, p.343）としてのジェネラティヴィティは，本来成人中期の発達課題であるが，教育・保育として人を育てる営みに携わる青年は，発達課題を前倒ししての取り組みが職業的専門性として求められるのではないだろうか。

杉村（2018）は，青年期のジェネラティヴィティ[1]について，日常的文脈および地域社会活動を通したジェネラティヴィティの発達について論じている。本研究では，青年期のジェネラティヴィティについて，人を育てる営みである教育・保育に焦点をあてる。教育には次世代を育成するという教師特有の専門性があり，子育てにおける次世代の育成と共通性があるとの指摘があり（植木, 2017），教育・保育の文脈における青年のジェネラティヴィティを検討することは意義あることと考えられる。

1．青年期の発達課題

生涯発達心理学の観点から心理社会的発達理論を提唱したErikson（1950）は，精神分析的個体発達分化の図式（epigenetic schema）を示しながら発達論を展開した。この理論の中で，とりわけ注目を集めたのがアイデンティティという概念である。アイデンティティとは，幼児期以来形成されてきたさまざまな同一化や自己像が，青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する，斉一性と連続性を持った自我の状態であり，アイデンティティの獲得は青年後期の課題である。

さらに，杉村（2005）はアイデンティティを明確化するためには，自分自身だけではなく他者の欲求や関心を認識し，それらをどのように扱うのかということが重要であると指摘し，アイデンティティ形成における他者との関わりを重視している。青年期は，「これから社会に出て社会に貢献できる個人として成長することを考えるなら，人とのつながりに対する関心を育てること，人とのつながりを模索する力を身に付けることも同じくらい重要である。つまり『アイデンティティ　対　アイデンティティ拡散』の危機の克服において，自分が他者や社会とつながり，一人前として認められることも重要なのである。アイデンティティの感覚を関係性の中で確認する作業は，青年に他者や社会の重要さを見直す機会を与えるだろう」（杉村, 2018）。つまり，青年のアイデンティティ探求は，自己と自己を取り巻く世界との関わり合いの中での模索である。

2．青年期のジェネラティヴィティを取り上げる意義

（1）ジェネラティヴィティとは

ジェネラティヴィティは，Eriksonの心理社会的発達論において成人中期の発達段階である第7段階として提示された概念である。Erikson（1950, 仁科訳 1977-1980, p.343）は，ジェネラティヴィティを「次世代を確立させて導くことへの関心」と定義したが，後に，Erikson & Erikson

[1]杉村（2018）では，「世代継承性」との語を用いて論じているが，本稿では「ジェネラティヴィティ」に置き換えて表記する。

（1997，村瀬・近藤訳2001, p.88）は，「子孫を生み出すこと（procreativity），生産性（productive），創造性（creativity）を包含するものであり，（自分自身の）更なる同一性の開発に関わる一種の自己―生殖（self-generation）も含めて，新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと（ジェネレイション）を表している」と再定義している。

つまり，実子の養育を第一義的なものとして捉えながらも，Erikson自身が，その定義を拡大し，実子の養育がジェネラティヴィティの発達にとって必要条件でも十分条件でもないという立場をとるようになった（Erikson, 1968）。ジェネラティヴィティはEriksonによる造語とされ，生殖性，世代性，世代継承性などさまざまに訳されてきたが，定まった日本語の訳語はまだみられない（串崎, 2013）。

近年のジェネラティヴィティに関する研究の大きな流れの一つとして注目されているのが，McAdams & de St. Aubin（1992）の研究である。この研究では，19歳から68歳の幅広い年齢を対象にジェネラティヴィティの検討を行い，ジェネラティヴィティを構成する概念モデルを提唱している（図1）。人は成熟した大人としての行動を求められたり，社会的役割を通じて期待される文化的要請（Cultural demand）と自己を向上させようとする自己発展的な内的希求（Inner desire）に動機づけられ，ジェネラティヴィティへの関心（Concern）を高める。高められた関心は，人類の発展を信じる信念（Belief），関与（Commitment）を生み，ジェネラティヴィティとしての行動（Action）へと向かう。最終的には自分なりの意味を持つジェネラティヴィティの物語り（Narrative）として統合されるとする。

（2）青年期におけるジェネラティヴィティ

杉村（2018）は，1990年代以降のジェネラティヴィティに関する研究のうち，特に発達段階として青年期を含む研究について文献研究を行い，次のことを指摘している。青年期における身近な他者との関係や地域社会活動への参加が成人初期のジェネラティヴィティへの関心と影響を与えるということ，さらに青年期におけるジェネラティヴィティがwell-beingや人生の意味づけ，自尊心などの高さと関連しており，適応において重要な意味を持つことを明らかにしている。ジェネラティヴィティとして，地域社会との関わりや，他者を教育するという体験は，自分が今まで知らなかった社会問題に触れたり，他者を援助するスキルを身に付けたりする大きな効果がある。つまり，何もしなければ成人期まで触れることがなかったジェネラティヴィティへの「文化的要請」（McAdams & Aubin, 1992）にいち早く気付くことができる機会が地域社会との関わりには内在されているのである（杉村, 2018）。

寺本（2015）や寺本・柴原（2015）は，大学生の次世代育成意識の醸成の必要性を説いている。将来に対する時間的展望のうち未来の結婚や家族に関する領域に着目したこの研究では，次世代育成意識と現在や未来に対する肯定的態度との関連が見出されている。つまり親になる以前から子どもや子どもの養育に関する理解を深めることは，青年の親になる準備性の活性化させていくことが明らかにされている。

先述したMcAdams & de St. Aubin（1992）の研究でみた場合，青年期においては，内的な希求（Inner desire）や関心（Concern）はあっても，ジェネラティヴィティを行使するようにとの文化的要請（Cultural demand）は成人期と比べて低いと考えられる（杉村, 2018）。一方で，そのような地域社会のなかで文化的要請が高い生活を送る青年のケースでは，異なる様相がみられるだろうか。次世代を健全に育成することは，今を生きる者にとって果たすべき責務であり，

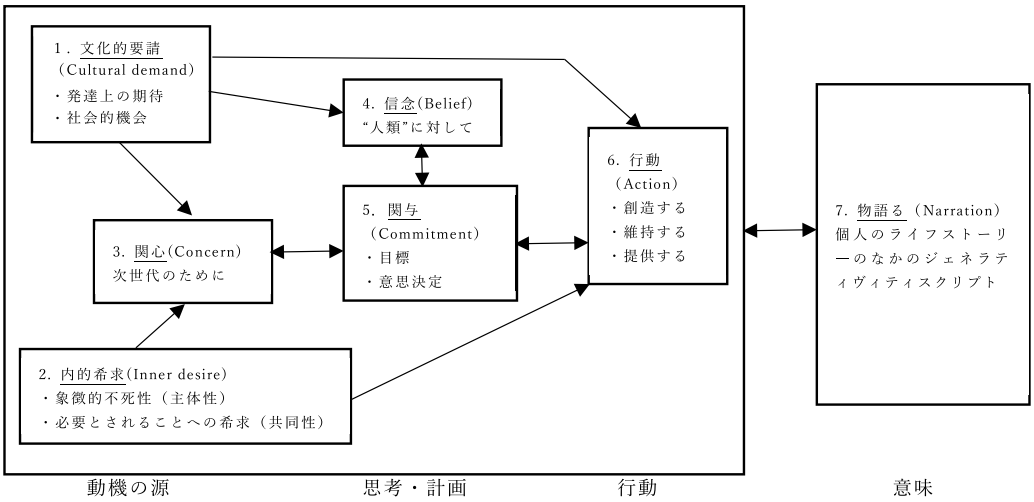

図１　ジェネラティヴィティの7つの特質（McAdams & de St. Aubin, 1992）

その資質を身に付けさせることはいつの時代においても重要な教育的課題の一つである（岡野, 2003）。次項では，文化的要請が比較的高いと考えられる人を育てる営みに関与する職業として教育・保育の文脈に焦点をあて，専門性の特色を整理する。

3．教育・保育に携わる者の専門性

(1) 現代社会が抱える子育ての課題

情報化の進展により，人と人の関わりを前提としなくても社会生活が成り立つ状況があらゆる面で急速に進んでいる。しかし，いかに情報化が進展しようとも，子どもが生まれ，育つ子育てという文脈は，当然であるが，人と人の関わりなしに成立することはあり得ない。子どもの豊かな育ちのためには，日常生活のあらゆる場面において，子どもの求めに応じるタイミングの良い応答的関わりが必須である。

一方で，核家族化の進行，地域の人間関係の希薄化が深刻である現代においては，子育ての孤立が生まれやすい。子育ての孤立を防ぐため，近年，保育に対する社会的ニーズは高まっている。そのような社会的要請による保育需要の増大，深化，多様化により，複雑な事象に対応できる高い専門性をもつ幼児教育，保育に携わる保育者（幼稚園教諭及び保育士）の存在が重視されている。

(2) 保育者に求められる専門性[2]

①子どもの保育における専門性

子どもの保育における専門性に関する研究は多くみられる。そのうち，本稿では特に，以下の2つの研究を紹介する。

[2]本稿では，保育者に求められる専門性として，保育士及び幼稚園教諭について述べることとし，保育教諭に関するものは割愛する。

一般社団法人全国保育士養成協議会（2014）は，保育者の専門性を「保育者基礎力」「保育に向かう態度」「専門的知識・技能」の3要素から捉え，各要素について，養成課程，勤務1・2年，勤務3・4年，勤務5年以上と，養成課程から現職保育実践者に至る保育者の専門性の成長プロセスを指摘している。まず「保育者基礎力」について，養成課程の時期の専門性は，社会人マナー，仕事に取り組む姿勢，社会的態度であり，勤務１・2年の時期の専門性は，仕事の遂行力，同僚性へのと育ちとして変化する。2つ目の要素である「保育に向かう態度」について，養成課程の時期の専門性は，基本的な態度（他者に対する愛情・思いやり，使命感を持って子どもと接する）であり，勤務1・2年の時期の専門性は子ども，保護者，保育者に向き合う態度，子どもの目線に立って考える態度，勤務3・4年では保育の柔軟さや深まり，勤務5年以上の時期では職場でのリーダーシップへのと育ちとして変化する。3つ目の要素である「専門的知識・技能」について，養成課程では発達理解，基本的な知識，勤務１・2年の時期は日々の保育を実践するためのスキル（観察・記録，指導計画，保育実践，環境構成，表現技術，虐待についての理解），勤務3・4年では，保育の深まり（総合的判断，遊びを豊かにするための技術，教材の作成・活用，特別な配慮が必要な子ども，家庭支援），勤務5年以上では，家庭支援・地域連携における中心的役割を担うためのスキルへと専門性の育ちが変化することが報告されている。

古屋・川口・村野（2017）は，養成課程に在籍する学生から現場経験5年目の保育者を対象に保育者の専門性について検討を行い，保育者の専門性は「保育を営む力」と「汎用的な力」の2側面から捉えることができることを示唆している。「保育を営む力」とは具体的には「造形表現能力」「子どもへの共鳴と受容」「保育の基礎知識・技術と実践力」「特別支援と児童家庭福祉」「音楽表現力」から構成され，「汎用的な力」とは具体的には「他者への思いやり」「日本語表現力」「豊かな感性と創造性」「社会性と協働性」「問題解決の思考」から構成されることを明らかにしている。

一方で，保育者の専門性に関する議論について，その構造的把握をめぐる諸問題を指摘している研究もある（吉田・鈴木・安部, 2018）。この研究では，保育者の専門性に関する議論の現状として，個人の人間性あるいは人格といった訓練可能なスキル以外のものを専門性に押し込めてしまっているという課題を指摘している。

②子育ての支援における専門性

平成17年に施行された次世代育成支援対策推進法の基本理念に「保護者が子育てについての第一義的責任を有する（中略）家庭その他の場において，子育ての意義についての理解が深められ，かつ，子育てに伴い喜びが実感されるように配慮」とあり，現代は子どもを育てる親への支援が非常に重要な問題である。社会としての次世代育成力を育む役割のなかでは，とりわけ保育者が行う家庭への支援は重要な意味を持つことになる。

全国保育士会倫理綱領では，保育士の倫理観に関して，「子どもの最善の利益の尊重」「子どもの発達保障」「保護者との協力」「プライバシーの保護」「チームワークと自己評価」「利用者の代弁」「地域の子育て支援」「専門職としての責務」の8項目を策定している。ここでは，「保護者との協力」，「利用者の代弁」，「地域の子育て支援」など，園を利用している家庭や保護者のニーズに応じること，保護者に適切な支援を行うことが保育士に倫理観として求められていることを確認することができる。

平成29年告示保育所保育指針には，「保育所は，入所する子どもの保護者に対し，その意向を受け止め，子どもと保護者の安定した関係に配慮し，保育所の特性や保育士等の専門性を生かし

て，その援助に当たらなければならない」とあり，つまり，子どものより良い育ちを保証し，子どもと保護者が安定した関係を築くことができるよう保護者を支え，子育てを支えることが保育士に求められている。

平成29年告示幼稚園教育要領には，「幼稚園の運営に当たっては，子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して，園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ，幼児期の教育に関する相談に応じたり，情報を提供したり，幼児と保護者との登園を受け入れたり，保護者同士の交流の機会を提供したりするなど，幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め，地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるものとする。その際，心理や保健の専門家，地域の子育て経験者等と連携・協働しながら取り組むよう配慮するものとする」とあり，教員が保護者に対して一方的に指導をするという捉え方ではなく，むしろ保護者を主体として保護者同士や他の専門機関とのつながりを持つことができるよう意図した支援を行うことが強調されていると言えよう。さらに，保護者との人間関係の構築においては，幼稚園においても，保護者及び地域社会との関係を構築する力が専門性として重視され，「園長や教員は，カウンセリングマインドを持ち，保護者を受け止め，円滑にコミュニケーションをとることが求められている」(文部科学省, 2006)。

このように保護者と関係を構築する力，保護者を支援する力は，保育士，幼稚園教諭共に必要な専門性であると考えられる。大学等での養成課程においても，子育て支援に係わる科目が新設されるなど，近年，保育士養成課程が改正され，保育士養成課程段階から家庭や保護者への支援に関する専門性が重視されるようになってきている。家庭の養育力の低下の社会状況のなか，保護者支援も保育に携わる者の中心的職務となり，保育者にはますます高い対人能力が要求されるようになってきている（丹羽, 2011)。

久保田・石野（2018）は，保護者へ行うサポートに関して，幼稚園，保育園および保護者を対象にアンケート調査を実施し，保護者へのサポートとして「相談的サポート」「報告的サポート」「対保護者ポジティブ情緒的サポート」「対子ども情緒的サポート」「対保護者ネガティブ情緒的サポート」の5因子を抽出している。中でも，子どもに対するサポートを保護者は最も必要としており，そのサポートが保護者自身の支援にも繋がっていることを述べている。さらに，保護者への直接的で情緒的サポートに関しては，保育者からのサポートを保護者は必ずしも必要としていないものの，実際にサポートが行われた場合には保護者が「ためになった」と感じる傾向があることが明らかとなっている。つまり，保護者の情緒的サポートのサポート源を見極めながら必要に応じて，サポート源からのサポートを受けられるようにしたり，保育者自身がサポートを行ったりしていくことが必要であるということである。

一方で，久保田・石野（2018）の指摘が保育者による保護者の支援における判断の難しさにつながる部分である。つまり，家庭が多様化し，子育てに関連する価値観をも多様化していく中で，子どもやその家庭にとっては必要なサポート，支援であると保育者の方は捉えていたとしても，その捉えが保護者と必ずしも一致しないということがある。時には，保育者の方は支援が必要であると思っていても，保護者の方は必要ないと考えるケースも多く，結果，支援の適切なタイミングがうまく噛み合わない状況が発生することがある。逆に，保護者からは必要と思われなくとも，深く介入し過ぎない範囲で様子を見ながら介入することにより，そのこと自体が保護者との信頼関係の構築を導き，久保田・石野（2018）の結果のように，結果として「保護者に喜ばれた」という状況も発生し得るのである。親子の適切な関わりを支える子育ての支援において

は，「不安なことがあればいつでも相談に応じてもらえる保育者である」と保護者から信頼されるための関係を構築できる高い対人能力としての専門性が必要になるのである。

4. 教育・保育に携わる者のジェネラティヴィティ

先にも述べたが，そもそもジェネラティヴィティは成人中期の心理社会的課題を説明する概念である。岡本（2014）はプロフェッションの生成と世代継承として次世代の育成を論じており，次世代を生み育てるだけではなく，職業を通じて社会に貢献し，次世代の成長に深く関心を注ぎ，関与することとしてジェネラティヴィティを捉えている。この「職業を通じて社会に貢献する」文脈として，教育・保育の文脈に焦点をあて，携わる者のジェネラティヴィティについて考える。

植木（2017）は「教育には次世代を育成するという，教師特有の専門性があり，子育てにおける次世代の育成と共通性があり，子育てにおける次世代の育成と共通性がある」と述べている。この指摘は，教育・保育の専門性とジェネラティヴィティとの関連を考察する上で示唆に富む。

植木（2015, 2017）と植木・渡部・中島・川端・後藤（2019）の研究では，小学校教師を対象とした研究を行い，保護者対応の文脈を通したジェネラティヴィティ[3]について興味深い結果が報告されている。植木ら（2019）は小学校熟年教師の保護者対応が変容するプロセスを検討し，その結果，保護者対応が変容するプロセスの特徴は視野が広がることであり，保護者対応におけるかかわり手が母親のみから他の家族の存在に注目するようになること，さらに視野の広がりに関与したのは教師を支える関係であり，教師よりも年齢が高い保護者が教師を支えるジェネラティヴィティと，異世代の教師が後輩教師を支えるジェネラティヴィティの2つがあると指摘している。つまり，人が人を育てる教育という文脈そのものが，立場が先輩教師であれ，保護者であれ，年長者が次世代を支えるという関係が自然に形成されるという特質を持つことが考えられる。

永田（2020）は，教師，保育者を目指す大学生のジェネラティヴィティに関する研究を行い，教職，保育に関する自己効力の感覚とジェネラティヴィティとの関連を検討している。この研究では青年期にも適用可能な尺度として串崎（2005）のジェネラティヴィティ尺度を用いて青年のジェネラティヴィティを捉えている。この尺度は，「生み出し育てることへの関心」「世代継承的感覚」「自己成長・充実感」「脱自己本位的態度」の4つの下位尺度で構成されている。その結果，大学3年次，4年次にかけて学生のジェネラティヴィティの得点は高くなること，さらに教職に就く，保育に携わることに関する自己効力の高まりとジェネラティヴィティ得点との間に正の関連があることを明らかにしている。

次世代育成の文脈として教育・保育はジェネラティヴィティの課題と関係があることが予見されるが，教育・保育に携わる者の専門性とジェネラティヴィティを直接的に検討した研究はこれまで行われていない。今後は，次世代育成の観点から子どもの教育･保育に携わることを通して，自己がどのようにジェネラティヴィティを高めていくかということに焦点をあてた研究が求められる。今後，実証的研究の蓄積が期待される。

---

[3]植木（2015, 2017）及び植木ら（2019）では「世代継承」の語が用いられているが，本稿では「ジェネラティヴィティ」に置き換えて表記する。

お わ り に

本研究では，青年期のジェネラティヴィティについて，人を育てる営みとしての教育・保育の文脈で捉えることの意義について論じてきた。近年の少子化社会においては，地域社会で子どもを育てるということ，子どもを育てる家庭を地域社会で支えるという教育・保育の果たす役割は大きい。先行研究では，ジェネラティヴィティの高まりには文化的要請が重要な影響を与えることが指摘されており，この意味において，文化的要請が高いとは言えない青年期のジェネラティヴィティの高まりは期待できないとの見方がある。今後は，次世代を育成するという教育・保育の文脈において，専門職である青年や成人のジェネラティヴィティが，職業を通してどのように発達，変容するのか，その様相について明らかにしていく必要がある。

引 用 文 献

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton.（エリクソン, E. H.　仁科弥生(訳)　(1977). 幼児期と社会１　仁科弥生(訳)　(1980). 幼児期と社会2　みすず書房）

Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.（エリクソン, E. H.　岩瀬庸理(訳) (1973).　アイデンティティ―青年と危機―　金沢文庫）

Erikson, E. H, & Erikson, J, M. (1997). *The Life Cycle Completed A Review Expanded Edition*. New York: Norton. (エリクソン, E. H,　エリクソン, J, M.　村瀬孝雄・近藤邦夫(訳)　(2001).　ライフサイクル，その完結<増補版>　みすず書房)

古屋　真・川口めぐみ・村野かおり. (2017).　保育者の専門性の成長に関する一考察（１）.　駒澤女子大学短期大学研究紀要, **50**, 91-101.

一般社団法人全国保育士養成協議会. (2014). 専門委員会課題研究報告 保育者の専門性についての調査―養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み（第2報）―(http://www.hoyokyo.or.jp/profile/senmon/index.html)　(2020年10月25日)

次世代育成支援対策推進法.　(https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_11367.html)　(2020年10月20日)

久保田智子・石野陽子. (2018).　保育者による保護者支援のあり方―保護者の必要とするサポートを踏まえた検討―.　教育臨床総合研究, **17**, 59-73.

串崎幸代. (2005).　E・H・Eriksonのジェネラティヴィティに関する基礎研究―多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して―.　心理臨床学研究, **23**, 197-208.

串崎幸代. (2013). ケアの与え手に必要な心理的要因について―ジェネラティヴィティを支えるもの―.　千里金蘭大学紀要, **10**, 79-83.

McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992).　A theory of generativity and its assessment through sell-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography.　*Journal of personality and Social Psychology,* **62**, 1003-1015.

文部科学省. (2006).　幼稚園教員の資質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために（報告）(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.html)　(2020年10月17日)

永田彰子. (2020).　教師・保育者を目指す大学生のジェネラティヴィティに関する探索的研究―大学3年生から大学4年生の追跡調査を通して―.　児童教育研究, **29**, 69-74.

丹羽さがの. (2011).　保育士養成課程の課題に関する一考察―4年生大学における保育士養成課程の課題について―. 白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報, **16**, 26-38.

岡本祐子編著. (2014). プロフェッションの生成と世代継承―中年期の実りと次世代の育成―.　京都: ナカニシヤ出版.

岡野雅子. (2003).　青年期女子の子どもに対するイメージ―彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連―.　日本家庭科教育学会誌, **46**, 3-13.

杉村和美. (2005).　女子青年のアイデンティティ探求―関係性の観点から見た2年間の縦断研究―.　東京: 風間書房.

杉村和美. (2018).　青年期の世代継承性.　岡本祐子・上手由香・髙野恵代（編著）　世代継承性研究の展望―アイデンティティから世代継承性へ―.　(pp.281-297)　京都: ナカニシヤ出版.
寺本妙子. (2015).　大学生を対象とした次世代育成に関する心理教育の実践と評価.　日本橋学館大学紀要, **14**, 25-35.
寺本妙子・柴原宣幸. (2015).　大学生の次世代育成意識と時間的展望の関連.　日本橋学館大学紀要, **14**, 15-23.
植木克美. (2015).　熟年教師のふりかえりから捉える保護者対応の変容過程.　日本教育工学会論文誌, 39(Suppl.), 41-44.
植木克美. (2017).「印象に残った保護者」とのかかわりにおける小学校教師の成長と世代継承―熟年教師と若手教師の事例比較―.　教育情報学研究, **16**, 21-34.
植木克美・渡部信一・中島　平・川端愛子・後藤　守. (2019).　小学校教師の保護者対応における変容プロセスと世代継承に関する研究.　北海道教育大学紀要（教育科学編）, **70**, 399-408.
吉田直哉・鈴木康弘・安部高太朗. (2018).　保育者の「専門性」の構造的把握をめぐる諸問題.　敬心・研究ジャーナル, **2**, 81-89.
全国保育士会　全国保育士会倫理綱領.
(https://www.z-hoikushikai.com/about/kouryou/index.html)　(2020年10月15日)